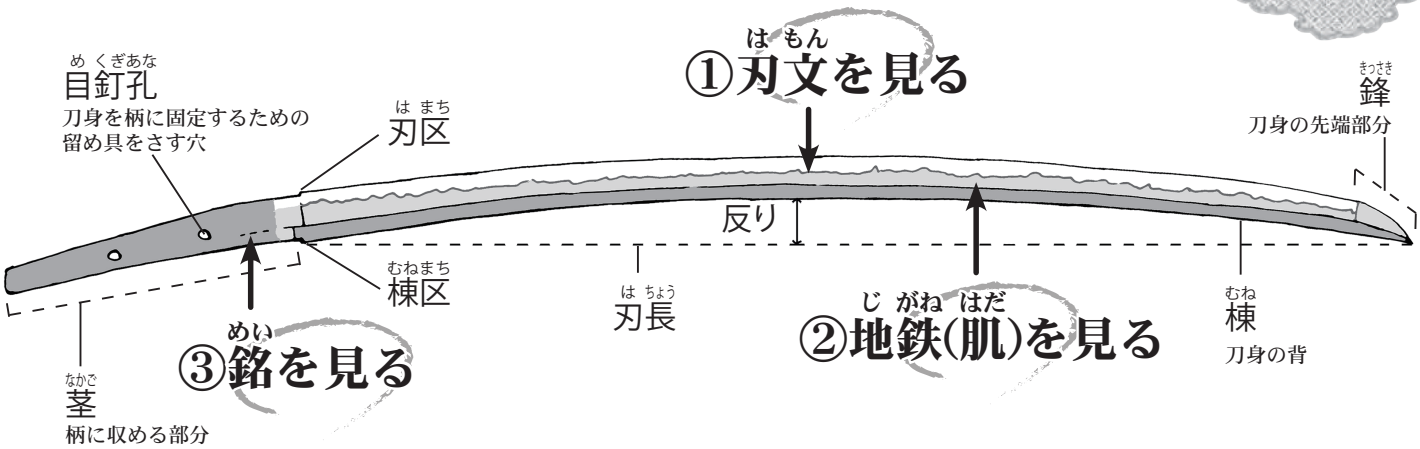
特別展 京のかたな鑑賞ポイント

匠のわざと雅のこころ

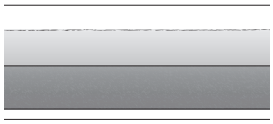
京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM



①刃文の種類

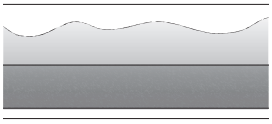
焼き入れの技術によって現れる線状の模様で、様々な形があります。刃文は刀剣を鑑賞する際の見どころのひとつで、作者や流派を判断する要素のひとつとされています。

直刃　直線的な刃文

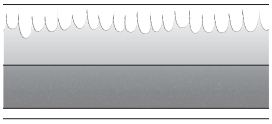


純粋な直刃はほとんどなく、わずかに湾れることが多い。

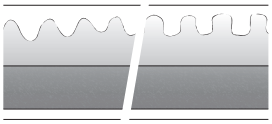
乱刃　曲線的な刃文



湾れ
広い範囲でゆったりと波打つ刃文。この中に丁子や互の目などが現れることもある。



丁子
小さなU字が連続して並ぶ刃文。丁子の蕾に似ていることからその名がある。

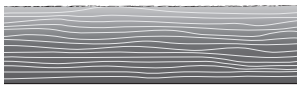


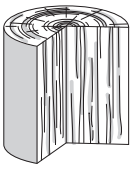
互の目
半円や山形などの突起が互い違いに連なる刃文。

②肌の種類

鍛錬で鉄が折り返されたり、焼き入れをすることなどで地鉄とよばれる黒い部分に現れる模様。木の断面に見た目に似ていることから木材用語が流用されています。作られた時代や地域を判断する材料にもなります。

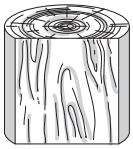
柾目





ほぼまっすぐな線が平行している。

板目



不規則な山や波のような模様。最も多くみられる。

杢目

同心円状のような模様。

③茎に刻まれた「銘」

茎に刻まれた名前（刀工・所有者・鑑定者など）や製作年などを銘と呼びます。名前のみのものもあれば、製作年月日まで記したもの、刀剣の価値を評価した鑑定の証明が刻まれていることもあります。

展示 No.160
重文「太刀 銘粟田口一竿子忠綱 彫同作／宝永六年八月吉」当館蔵
作者の名前　製作年月日

豆知識：磨上げ

時代や用途を背景に、刀剣を現状より短くするため茎側から削っていくことを磨上げといいます。太刀が打刀に直される時などに行われ、銘が完全になくなる程に磨上げられたものは大磨上と呼ばれます。
磨上げした刀剣の茎には、誰が磨上げたのかを既存の銘に付け加えたり、新たに刻んだりすることもあります。磨上げにより茎側からだけ削られた刀剣は、全体の反りなどのバランスがいびつになります。

刀剣の分類

太刀（たち）	鞘についている金具と紐で腰の帯から吊るして身につける刀。刃が下を向く。馬上戦での使用とともに発展した。
打刀（うちがたな）	腰の帯に直接差し込んで身につける。刃が上を向く。徒歩で行う戦闘に用いられた。
脇差（わきざし）	打刀の副兵装として用いられる短めの刀。打刀と同じく腰に差して身につける。
短刀（たんとう）	主に八寸(24㎝)前後の長さで、腰刀や懐刀などと呼ばれ用途がさまざまある。

太刀

打刀

刀剣は、身につけた状態と同様に太刀は刃（切れる側）を下向きに、打刀・脇差・短刀は刃を上向きに展示されます。また身につけた状態で持ち主側が裏、外側が表とされ、銘は通常表側に刻みます。
展示中の絵画や絵巻作品に戦う武士の姿が描かれています。身につけているのがどんな刀剣かぜひ観察してください。

「名物・号」について

刀剣の名称には名物や号といった通称がつけられていることがあります。刀剣にまつわるエピソードや、所有者の名をつけたものなど様々なパターンがあり、刀工の名前とあわせてつけることが多くなっています。

エピソードに由来

例 号 歌仙兼定（かせんかねさだ）

刀の持ち主であった細川忠興（豊前小倉藩主）がある時、この刀で家臣の首を次々と刎ねた。その人数が 36 人だったことから、“三十六歌仙（奈良・平安時代の 36 人の優れた歌人のこと)”にちなんで歌仙と名付けられた、とされるが細川家の記録にこのような事実はない。

状態に由来

例 名物 三日月宗近（みかづきむねちか）

刃文に三日月形がいくつも見え、光にかざすとまるで月が浮かんでいるように見えることから。

例 名物 鯰尾藤四郎（なまずおとうしろう）

鋒が鯰の尾のようにふっくらとした形をしていることから。

所有者に由来

例 名物 前田藤四郎（まえだとうしろう）

加賀藩藩主の前田利政が所持していたことから。

例 号 明石国行（あかしくにゆき）

越前松平家の分家・明石松平家に伝来したことから。

特別展「京のかたな」頻出用語

794
平安時代
1185
鎌倉時代
1333
南北朝時代
1392
室町時代
古刀
1573
桃山時代
1615
新刀
江戸時代

山城物【やましろもの】	京都とその郊外で作られた刀剣。京都での作刀は平安時代後期から現代まで続く。
古刀【ことう】	桃山時代の慶長年間頃を境として、それ以前に作られた刀剣の総称。新刀に対する語。平安時代後期～室町時代前期まで主役であった太刀と、それ以後太刀に代わって作られた打刀、腰刀として用いられた短刀などが存在する。
新刀【しんとう】	慶長年間以降に作られた刀剣を総称して新刀と呼ぶ。新しく作られた刀を意味する新刃（あらみ）とは異なり、古刀に対するものとしての語。この時期には埋忠派や堀川派、三品派などが活躍した。
山城鍛冶の流派	
三条派【さんじょうは】	平安時代後期に京都の三条通りに居住したとされる刀工の集団。宗近を祖とする。名は彼らが居住していた三条通りに由来する。
粟田口派【あわたぐちは】	鎌倉時代に京都粟田口に居住した刀工の集団。中でも吉光は『享保名物帳』に数多く所載されている。
来派【らいは】	鎌倉時代中期～南北朝時代前期にかけて活躍した山城国の刀工の集団。
長谷部派【はせべは】	南北朝時代の国重・国信らを中心とする刀工集団。大和（現在の奈良）の出身で、鎌倉に赴いて作刀技法を学んだ後、京都に移る。
埋忠派【うめただは】	埋忠家は鐔や刀装具の製作、刀剣の加工などを生業としていた一族で、埋忠派は彫金の流派としても知られる。桃山時代の名工・埋忠明寿は、京都・西陣に居住した。
堀川派【ほりかわは】	慶長から寛永年間に、京都の堀川一条で活躍した刀工の集団。国広を祖とする。

参考：『国史大辞典』

監修：末兼俊彦　編集：京都国立博物館企画室